

『 その後の北条氏 』

はじめに

昨年大河ドラマは『鎌倉殿の十三人』でした。

鎌倉幕府の公的記録とする『吾妻鏡』には、その日の天候や事件や、誰がどうした等々、詳細が記載されています。

大河はあくまでドラマで作り物という人もおられますが、多くの方が観られたと思いますが、史実や文献とは違うことをやっていました。

「比企氏の乱」は、全くという程に、『吾妻鏡』の記述してあるものとは相違した事として描き、最終回は北条義時の臨終間際のシーンでしたが、同様の感じです。詳細は最後にお話いたします。

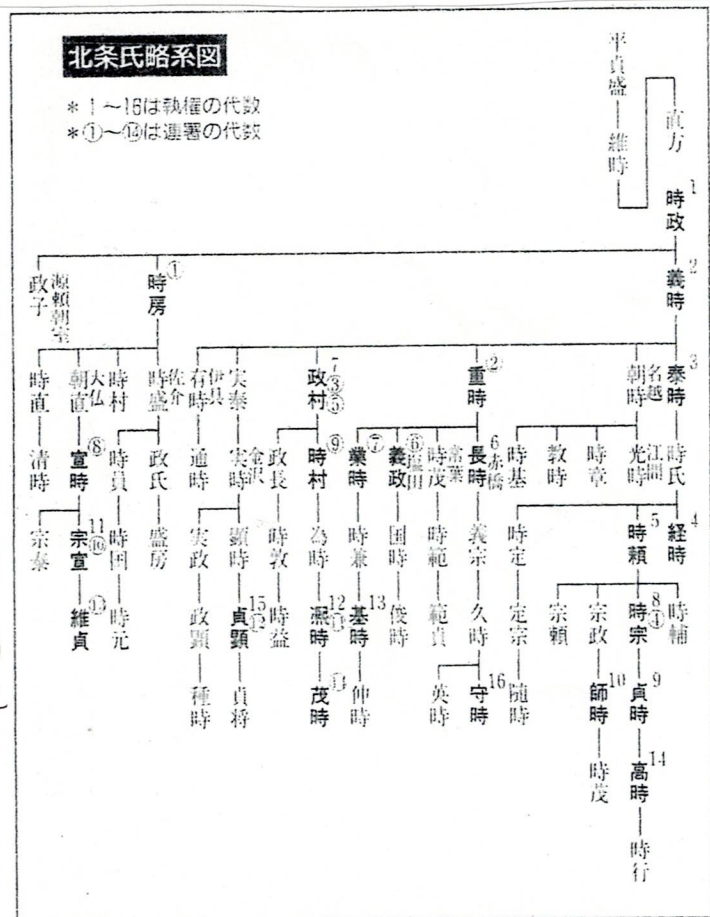
1. 名執権は三代泰時としているが、本当か…？

源実朝が甥の公暁に暗殺された建保七年（1219）一月、源氏が滅びると、元弘三年（1333）迄、百十四年間にわたって北条氏の執権政治は続いたのである。

この頃は鎌倉時代の全盛期と思われ、建長四年（1252）に鎌倉で飢饉（大火と大暴風雨に見舞われ）のため、酒の売買が禁じられた。この時、民家の酒壺を調べた事が『吾妻鏡』に残されている。酒壺は37274個あったという。酒飲む人、飲まない人を想定すると、人口は20万人程位はいたと思われる。

全盛期を迎えながら、蒙古の侵略に対する国防の疲弊をきっかけに、北条一門は落日の影を濃くしていったのである。

承久の乱の3年後の貞応3年（1224）6月13日、北条義時は62歳で急死した。泰時が執権となった翌年嘉禄元年（1225）6月10日、大江広元が78



歳で死去する。

一か月後の7月12日には尼將軍・北条政子も69歳で生涯を閉じた。

政子は実朝と同じく、廃寺となった勝長寿院に葬られた。今日寿福寺に見られる寿福寺の墓は供養塔であろう。

政子が死んで5年後、三代將軍実朝の跡を継いだ九条頼経は13歳で結婚する。相手の女性は頼家の娘で竹御所である。この時竹御所は28歳であった。

貞永元年(1232)8月、泰時は“貞永式目”(御成敗式目ともいわれる)百五十一ヶ条を制定した。この法制は、後に室町幕府や戦国大名たちも規範にしている。

天福二年(1224)7月27日、竹御所は死産した。

ついで、竹御所は悩乱し、32歳で死没したと伝えられている。この死産は、実は無事に男子を出生したが、源氏嫡流の血が復活するため、窒息死させてしまったもの。それで竹御所が狂い死にしたのではないかと疑えるのである。

執権泰時は公私わたり清廉で、最も英明な政治家とされているが、源氏を絶やすことにおいては、祖父・時政や父・義時の方針を踏襲したのではないか。

泰時は朝比奈切通の開通にも尽力したが、仁治三年(1242)6月に60歳で死去した。

泰時の墓は大船からほど近い、常楽寺にある。そこには源頼朝の長女・大姫と悲運の武将・木曾義仲の遺児・義高も眠っている。四代執権には孫の経時が就任した。

2. 策謀家であった五代執権・時頼。

四代執権の経時は寛元年(1246)3月、23歳の若さで死去。泰時の孫にあたる頼時が20歳にして、第五代執権を継いだ。

時頼は鎌倉五山第一位の建長寺を建長5年(1253)創建する。巨福呂坂の北側は地獄谷といった。昔は風葬が行われ、後に処刑場となった処でもある。その谷の南西に面して建長寺を建立したのである。

禅寺の山門に掲げられ「葦酒山門に入るを許さず」とうのは、この寺の開山の蘭溪道隆の遺戒によるものである。



北条頼時が創建の建長寺

宝治元年(1247)5月、鎌倉中に、「三浦泰村が謀叛を起こす……」との噂が広がった。その月の21日、八幡宮の鳥居前には「三浦泰村は近日誅される」との立札が建つ。

三浦泰村は時頼に異心のない旨を述べ、時頼も「貴下を誅伐する心はない」との書面を送った。

時頼の母は松下禅尼で、その父が安達景盛であった。景盛は三浦氏とは犬猿の仲であり、景盛は強引に三浦泰村追討の兵を挙げた。時頼の兵もこれに加わる。

三浦氏の一族は、頼朝の法華堂に籠り、合戦は六時間に及び、力尽き、自ら死を選び、

その数は五百余人に及んだとされる。

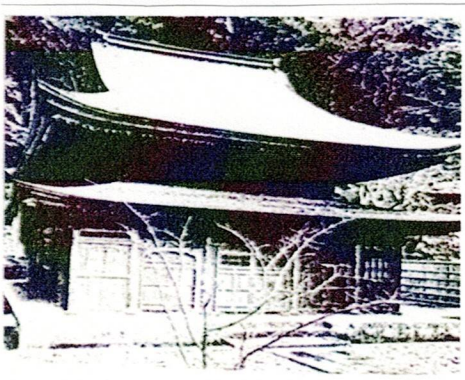
十日後、時頼は泰村の妻・姫宮から前記の書面を取り返したのである。時頼ははじめから泰村をだまし討ちにかける気であったのである。

時頼は康元元年（1256）11月、30歳の時に出家し、執権職は北条重時（泰時の弟）に譲るも、政治に関与し続けていた。時頼は弘長3年（1263）11月、37歳で死去する。その翌年執権重時は36歳で死時頼は死に臨み記した「業鏡高懸 三十七年 一槌打碎 大道坦然」は育王山の笑翁妙湛からの盗作であり、七十二年を三十七年に変えただけのものであり、あつかましい男であると思慮する。

3. 蒙古襲来と北条時宗

執権は北条長時から政村。時宗と変わった。

国難がやってきた。文永四年（1267）9月、高麗王・元宗の使者は蒙古王・フビライの



北条時宗創建の円覚寺舍利殿

親書を持って来日し、大宰府に着いた。この書は「大蒙古国皇帝、書を日本国王に奉ず」とあるが、文末には日本が蒙古の臣ではないとことを明らかにしているが、幕府の対元政策は終始強硬であった。

南宋から日本に難を逃れてきていた禅僧達は「元国には海軍力はない。水際に来るまで待って討つべきである。元の艦船が日本まで来られるかどうかである」と述べていた。

文永七年（1270）1月、朝廷は蒙古への返事を幕府に下したが、幕府は握り潰して、元に使者を出さない。翌年、元の使者、その翌年には高麗の使者が元の国書をもって来日、文永十年3月には元の使者が来日するも、幕府は悉く無視したのであった。

文永十一年（1274）10月、蒙古の帝王フビライはついに日本へ攻撃にでた。

10月5日、対馬海岸佐須の浦を襲い、守護代・宗資^{そうすけ}国^{くに}を殺害、14日壱岐を攻略、守護代・平景隆を討った。19日、博多湾に来攻。20日には三地点に上陸した。

迎撃したのは筑前国守護・少式資能^{すえなげ}の子、景資^{かげすけ}のほか豊後の大友頼泰、肥後の菊池武房、竹崎季長らである。戦闘は日本に不利であった。敗因は鉄砲であり、強弓から放たれる毒矢だった。日本軍は大宰府まで退却せざるを得なかった。

高麗軍は敗走する日本軍を大宰府に追って、一気に勝利をつかもうとしたが、元の幹部は軍兵を船に戻すことを主張し、意見が割れたのである。

その夜、大風雨が起こる。元と高麗の軍船は難破し、その連合軍3万3千人のうち、1万3千人が失われた。これを日本は神風と呼んだ『元寇』の始まりであった。「文永の役」である。

弘安二年（1279）7月、再び元使が筑紫に着くが、幕府はその場でこれを斬ったので

ある。その2年後の5月、高麗軍は対馬を侵略、6月には元軍も合流、志賀島、長門を襲う。

今度の襲来は元が日本を属国とする目的であった。蒙古・高麗軍4万人、船9百隻を揃え、日本の占領を企てたのだ。

日本軍は少弐景資と鎌倉御家人の安達泰盛の子の宗景が加わり、諸将を指揮した。そして、7月1日夜、大暴風雨によって元軍の8割近い十万七千人を失い、元の日本占領は挫折したのである。これこそ日本にタイムリーな台風の定期便で、“神風”であった。「弘安の役」である。

時宗は国難をしりぞけた名執権の声が高いが、文永九年（1272）2月には、北条氏の同族争いから、兄・北条時輔を京で殺害。それより4日前には、北条時章、北条教時の兄弟も殺された。この二人を斬ったのは大蔵次郎左衛門ら5人の武士であったが秘密を恐れた時宗は、この5人も捕縛し首を刎ねている。

弘安七年（1284）4月日、時宗は34歳の若さで死去する。時宗のあとを継いだ九代執権・貞時は14歳の若さであった。そこで、権勢を得たのが安達氏である。そして、翌年には「霜月騒動」といわれる安達泰盛一族が滅亡する事件が発生した。執権貞時の後見人を自認していた平頼綱は反対勢力の泰盛の子宗景が謀叛を企てていると貞時に進言し、安達一族五百余人を討ったもの。

安達氏は鎌倉幕府の草創・確立に功をあげた一族で北条氏の治政下で最も強大な勢力を誇った一族であった。

以下、北条一族の事について割愛するが、楠木正成をはじめとして、後醍醐天皇の皇子・護良親王を中心に討幕の火が飛び火を重ね、幕府は足利高氏（のち尊氏）を追討軍大将を命じるも、反旗を翻し、時代の流れはもはや幕府に味方しなかったのである。

元弘三年（1233）5月22日、北条高時は敗残の将士一千余騎をまとめて、葛西ガ谷の東勝寺に立てこもり、腹を切ったのである。31歳であった。

【参考文献】

「鎌倉事典」	白井永二	東京堂出版
「北条氏九代の陰謀と盛衰」	沢 史生	創元社
「全譯吾妻鏡」	貴志正造	新人物往来社
「歴史読本 八代執権北条時宗」		新人物往来社
「平安鎌倉史紀行」	宮脇俊三	講談社
「鎌倉・室町人名事典」	安田元久	新人物往来社
「もっと行きたい鎌倉歴史散歩」	奥富敬之	新人物往来社
「陰謀の日本中世史」	呉座勇一	角川新書

(完)

『比企氏の乱』は北条氏の陰謀

比企氏とは

比企氏の本拠地は武蔵国比企郡（現在の埼玉県比企郡と東松山市の一部）の郡司で、それ以前は神奈川県秦野市に住み着き、康和年間（1099～1104）、この比企郡に移り住みみ土着して比企氏名を名乗ったとされている。

秦野市の頃は、波多野氏を名乗り、秦氏の出であろうとしているが、絹織物や製鉄の技術を持つ渡来系の氏族流れが比企氏であったということになる。

平安時代後期の頃の当主は遠宗で、若くして京に上り、源頼朝の父・義朝に仕え、保元・平治の乱にも遭遇しており、平治の乱で、平清盛に義朝が敗死したが、その後、嫡子の源頼朝は、清盛の前に突き出され、極刑とされるどころ、池禅尼（清盛の継母）の懸命の嘆願にて、死一等を減ぜられ、伊豆の蛭小島に流罪となった。

比企遠宗は妻（禅尼・実名不詳）と共に、比企郡から伊豆まで、鎌倉幕府が開かれる迄の20年余（遠宗は直前死去）にわたり、生活の糧を送り届けていたのである。頼朝の乳母父として遇していた。ただし、女子三人だった為、甥の能員を迎えた。比企能員は御家人として源平合戦や奥州藤原氏討伐にも功績を上げ、北条氏を凌ぐ、御家人筆頭の地位を築いていったのである。

検証 比企氏は、鎌倉幕府開設から源頼朝に沿い、一般的には北条氏の名前がでていますが北条氏を凌ぐ一族であった。

(1) 「比企氏の乱」は北条氏が政変を断行したもの。

実は源頼家は、比企氏館で誕生しており、比企能員の妻が乳母であり、長じて、能員の娘・若狭局と結婚しており、長男・一幡も生まれたのである。

比企氏は初代將軍・頼朝の頃より、御家人として勢力があり、頼家の代になっても更に、伸長していったのである。

- ① 頼朝が死去して、4年後の建仁3年（1203）7月、將軍頼家病気で臥す。
- ② 同8月27日、『吾妻鏡』に次の通りの記述あり。

「將軍家の御不例、こと危急の間、御護補の沙汰あり、関西三十八ヶ国の地頭職をもって、舎弟千幡君（後の実朝）に譲りてたつまつる。関東二十八ヶ国の地頭ならびに惣守護職をもって、御長子一幡君に充てられる。ここに外祖比企判官能員、ひそかに讓補する事を憤怒し、叛逆企て千幡君ならびに、外家己下を譲りたてまつらんと擬すと云々」

検証 頼家が病気とはいえ、領地の相続を長男の一幡に与えるのは当然ながら、弟の実朝にも与えるのは論理上、矛盾がある。これは実朝を要する北条時政の策謀である。

③ 比企氏滅亡の運命の一日（『吾妻鏡』の記述を抜粋）

イ. …朝…

比企能員が婿である將軍頼家を訪ね、前記の相続について異議を唱え、北条時政を討伐との密談を行った。ただし、障子を隔てた処に居た北条政子がそれを聞き、名越の時政邸に使いを仕向けた。

検証 これはどう考えても合点がいかない。頼家と政子は同居しておらず、これほどの大事な密談を障子を隔てた処にいる政子が聞こえる様なことは考えられない。そして、この日の夕方に比企氏を襲撃した北条氏や御家人一同の正当性を誇示するもの。この『吾妻鏡』の箇所は創作と思慮する。

ロ. …昼…

北条時政が薬師如来像の供養のため、比企能員に招待状を家臣に届けた。比企一族は、北条との風聞を考え、武具を持ち、家臣を従えさせる事を上申したが、能員は仏事であり、問題ないとし数名の家臣だけで、名越の北条時政邸に出向き、門の前で、仁田忠常・天野蓮景によって、能員の左右の手を取って、殺害したのである。

検証 鎌倉幕府の公的歴史書と言われ、北条氏よりの『吾妻鏡』であるが、実に悪辣な比企能員の暗殺である。

ハ. …夜…

北条政子の号令により北条義時・同泰時・平賀朝政・畠山重忠・三浦義村・和田義盛・他多くの御家人が大挙して、比企ヶ谷の比企氏館を夜襲。一幡君を筆頭に一族は滅亡した。

翌日、翌々日も比企氏関係者を捕縛・処刑す。比企氏との縁戚である島津義久は大隅・薩摩・日向等の国の守護職を罷免された。

後に島津義久は上記三国の守護職を復活安堵されたのである。

頼家は將軍職を剥奪され、北条時政所有の伊豆修善寺に幽閉された。

検証 比企氏は何も落ち度もない。頼家の子・一幡は政子にとって孫であり、時政にとってはひ孫である、非人道的な北条氏の面をみた。鎌倉幕府の筆頭御家人の座を奪う為の政変に滅亡させられた事変が「比企氏の乱」であったのだ

重大な事実が他の文献で判明 藤原定家の『明月記』に9月7日の条に記述あり。

「(前略) 左衛門督頼家卿薨じ、遺跡の郎從権を争ふ。其の子外租、遠江国司時政の為に討たれ、其の所従等を京の家々に於いて追捕摩滅すと云々。金吾(頼家)の弟童(実朝)家を継ぐべき由」。鎌倉幕府から京都後鳥羽上皇にへの上奏文であるが、当時の飛脚では京都まで、5~6日かかり、鎌倉を発ったのは9月1日か2日と想定される。

この奏上文では頼家は死去したためとあるが、死んではない。

時政は既にこの時、頼家・一幡。能員の殺害を予定していたことになるのである。

北条一族が関係した事件と首謀者等一覽

事件及び犠牲者	事件発生日	事件の概要	首謀者	加担者
<p>源氏殲滅・滅亡</p> <ul style="list-style-type: none"> ○曾我兄弟の仇討 (曾我十郎祐成、五郎時致) ○源頼朝の死? 	<p>1193. 5. 28 1199. 1. 13</p>	<p>『曾我兄弟の仇討』は、後世美談としてい るが、実際は源頼朝暗殺未遂事件? 『吾妻鏡』に頼朝の死の前後の記事が欠落。 前年末の相模川橋供養の際、落馬が原因と するが、北条時政等による暗殺の可能性? 源頼朝亡き後、生き残りの兄弟として、 北条氏としては邪魔な存在であった... 『吾妻鏡』「八田知家仰せを奉り下野国 において阿野法橋全成を誅殺す」のみにて 従兄弟の実朝の死により挙兵。義時の命を 受けた金澤行親の手勢により敗死</p>	<p>北条時政 大江広元</p>	<p>— 北条政子、北条時政</p>
<ul style="list-style-type: none"> ○阿野全成 (今若丸) の殺害 ・全成の子頼全の殺害 ・全成の子時元、挙兵し敗死 	<p>1203. 6. 23 1203. 7. 16</p>	<p>比企の乱にて下記の頼家の子一幡が殺され 修善寺に幽閉され、時政の追手により謀殺 比企氏と頼家が北条氏に対抗の機運ありと 時政が比企能員を謀殺、一幡他比企氏滅亡 和田の乱の後、残党が頼家の子栄実を大将 軍となし反逆を企て、京都で襲われ自刃。 『吾妻鏡』には記載無し。叔父実朝を暗殺 した公暁に加担したとの嫌疑で、京都東山 実朝自身は暗殺を予見していたと思われ が、跡継ぎのない実朝の継承を謀議してい た義時と三浦義村の陰謀の結果が暗殺か。</p>	<p>北条時政 北条義時 北条義時 北条義時 北条義時 北条義時</p>	<p>北条義時、八田知家、北条政子、阿 波局 北条義時、北条政子 北条政子 北条政子 北条政子 北条政子、大江広元 北条政子 三浦義村</p>
<p>御家人族滅亡</p> <ul style="list-style-type: none"> ○梶原一族の滅亡 ○比企一族の滅亡 ○畠山一族の滅亡 ○和田一族の滅亡 	<p>1200. 1. 20 1203. 9. 2 1205. 6. 22 1213. 5. 3</p>	<p>『玉葉』に「御家人の間に頼家を倒して弟 実朝の擁立を図る陰謀あり、これを景時が 頼家に報告するも信用されず追放された」とある。 將軍頼家の権力を二分すること」に怒った 比企能員と頼家の話を、隣室で聞いた政子 が時政に伝え、能員を謀殺し、比企一族滅亡。 義時は、時政・牧の方の畠山重忠を当初拒 絶するも、追討に承諾したとするのは?? 梶原・比企・畠山等有力御家人が滅亡した 後の標的となったのは和田義盛であった。</p>	<p>北条時政 北条時政 北条時政 北条義時</p>	<p>阿波局、三浦義村、和田義盛 北条政子、和田義盛、平賀朝雅 北条義時、平賀朝雅、牧の方 三浦義村、大江広元</p>